

まつかわ

□□□ 第6号 □□□

はじめに

新型コロナの関係で昨年度の校長講話はオンライン配信をしましたが、本年度は紙上校長講話ということで、学校だよりを使ってお話をさせていただきます。よろしくお願いします。

現在、飯田市美術博物館で「菱田春草没後 110 年特別展 故郷につどう^{しゅぎょく}珠玉の名画」が開催されています。「もうみてきました。」という人も沢山いると思われそうですが。国の重要文化財にも指定されている「王昭君^{おうしやうくん}」「賢首菩薩^{けんじゅぼさつ}」「黒き猫」長野県宝「菊慈童^{きくじどう}」が一同に集まることは稀であり、「落葉^{おちば}」（重文の方ではないけれど）などその他の多くの春草の力作、そのためのスケッチなども数多く展示されています。また、未完の作品「雨中美人^{うちゅうびじん}」に色を塗ろうというワークショップも開かれ、松川中からも2名の参加があり、南信州の記事にも参加した1年生の素敵な感想が載っていました。私は現在、菱田春草研究委員会という下伊那教育会（下伊那の先生たちの会）の委員会に所属している関係で、飯田市美博から特別展への寄稿を依頼され、先日その文章が南信州に掲載されました。「そんなの知らなかったよ」（どこかのCMで言われているフレーズ？）そういう人もいるかなと思い、校長講話として、郷土が生んだ偉大な画家に少しでも興味を持ってもらおう一助となればと願ってここに掲載させていただきました

没後 110 年特別展 菱田春草 5 研究委員会を通して

昭和 30 年、「郷土の先覚者、菱田春草について研究調査し、その偉大さを顕彰し、教育の場に資する」ことを目的に、下伊那教育会の中に菱田春草研究委員会が設置されました。以来 66 年間にわたって、春草やその作品にまつわる研究、調査、更には授業における鑑賞教育のあり方などを中心に幾多の先生方に引き継がれながら今日に至っております。

私がこの春草委員会のメンバーとなったのは平成 18 年のことです。（例年 8 名程度で美術科の教員を中心に組織されています。）当時の校長先生から、「美術の先生として勉強してみないか。」と声をかけてもらったのがきっかけでした。

私为新メンバーとなったこの年、春草委員会の研究の中心に「菊慈童」が取り上げられることになりました。4 年前の平成 14 年に「春草作品を飯田へ」との運動が盛り上がり、飯田市は募金を募り「菊慈童」を購入。本物を飯田市美術博物館で見ることができるようになったため「菊慈童」が満を持して取り上げられたと記憶しています。

この年の研究の中心は、春草が「菊慈童」の制作に至るまでの経過を、当時の美術界の情勢と照らし合わせながら、新しい日本画に挑む姿に焦点を当てたものでした。

その中で、春草が目指した新しい日本画に対し、古典日本画を見直す一団があり、その代表的な絵師が河鍋暁斎^{かわなべきやうさい}であったことについても触れられました。これは余談ですが、本年度の直木賞受賞作^{きわだとうこ}。澤田瞳子著『星おちて、なお』はこの河鍋暁斎の娘であり絵師となった河鍋とよを主人公とした小説です。この小説の中で、とよと女子美術学校の生徒が会話する場面があるのですが、そこで春草の話題となり、女子美の生徒さんから春草の描いた「唐美人図^{からびじんず}」が絶賛されるのです。これは物語ではありますが、とても誇ら



しい気持ちとなり、さらに興味深く読ませていただいた次第です。

さて話を元に戻します。翌19年も「菊慈童」を継続して研究することになりました。新しい日本画として空気、空間を表現する方法を探る中、輪郭線に注目し、迷いつつ葛藤しながら、それを排除する方向に向かっていった春草。明治31年「寒林」明治32年の「秋景」を経て、遂に明治33年「菊慈童」が描かれました。「朦朧体」と揶揄されながらも、新しい日本画を求めた春草の挑戦を、私たちは彼が書いた文章を手がかりに推察し、「菊慈童」を今まで以上にじっくりみることを通して研究を進めて行きました。

そんな2年目の夏、私たち春草委員会のメンバーは貴重な体験をすることとなります。夏休みを利用した飯田市美術博物館での研修会において、「菊慈童」をガラス越しではなく、直接、遮るものが何もない状態で、口にハンカチを当てながらみるのができたのです。巻かれていた軸から姿を現した「菊慈童」。春草がこの絵に向かって描いている息遣い、そして絵の中の深山幽谷の世界に引き込まれながら、悠久の時を超越していく不思議な感覚を味わった瞬間でした。

平成20年。春草委員会に入って3年目の研究の中心は、前年、前々年の研究を土台として、「菊慈童」を教材化し、この作品が生徒に何を語りかけるのかに焦点をあてた鑑賞の授業をするということになりました。私は授業者として中学3年生に向け、この授業を行いました。授業の最後の場面での生徒の言葉を紹介します。「結局あの子どもは何を考えているのかよくわからなかったが、寂しい感じや、ものわびしい感じがひしひしと伝わってくる力をもつ作品。それにこの作品では、メインを子どもなのか風景なのか、あやふやにしているところが見る側の自分たちにかなり考えさせてくれる。春草のすばらしいところだと思った。」1時間どっぴりと「菊慈童」の世界に浸りきった生徒たちの姿が今も私の脳裏に鮮明に焼き付いています。

あれから13年の歳月が流れました。久しぶりの「菊慈童」との再会です。今度はどんな言葉で私たちに語りかけてくれるのか、春草の息遣いを再び感じながら、深山幽谷の世界にどっぴりと浸りたいなと思っています。

おわりに



13年前の
松川中美術室
です

ここに菊慈童が
……

さて、いかがでしたでしょうか。「菊慈童」は最後まで展示されていますが、残念ながら「黒き猫」は前期のみの展示でもういません。しかし代わりに後期は「白き猫」に会うことができます。会期は11月7(日)まで高校生以下は無料です。この機会に是非ご家族でご覧いただければと思います。読んでいただきありがとうございました。

保護者の皆様へ

新型コロナの感染は減少していますが、もうしばらく基本的な感染対策は継続していく必要があります。しかし、マスクをつけ続けることにより学校を休まなくてはならないような強いストレスがある人や、口元にかぶれや湿疹などの病気がある人など、健康上の理由により、校内でマスクをつけることが困難な場合は保護者の皆様から学校に申し出てください。また、そのことで、つけていない人に対して、誹謗中傷をすることが絶対に無いように、思いやりと支え合いの気持ちで対応できようように学校でも指導していきたいと思ひます

また、引き続き健康観察の継続をお願いします。風邪やインフルエンザ等も心配される季節となりますので、健康管理には細心の注意を払っていただければと思います。